

中等作文教科書の考察

——昭和期旧制高等女学校のばあい——

野地潤家

一

昭和初期、旧制高等女学校において用いられた作文教科書として、代表的なのは、金子彦二郎氏の編まれた、「現代女子作文」全五巻である。これは、「現代女子作文」全四冊（大正一四年一月一八日、光風館書店刊）を全面改訂されたもので、昭和五年（一九三〇）一二月一〇日に刊行された。

これら修正再版「現代女子作文」各巻は、つぎのように構成されていた。

巻一

第一 我が校の校歌 その一 望みの校歌を その二 真澄の鏡
その三 作者の立場から（著者）／第二 眞実は動かす（文話）
第三 女学生初日より その一 遠足のことを旧師に その二 岐
阜のいとこへ その三 叔母様もきつと／第四 新緑の天地を行
く（遠足の記） その一 其の前夜 その二 映画脚本風に書いて
その三 この次、園分寺——／第五 眞実味のあふれた名文（文
話）／第六 絵から文を その一 絵を描く少女 その二 猫を

抱いた少年 その三 水いたづら／第七 我が家の人々 その
一 蓄音機 その二 うちのお祖母さんたら その三 秀ちゃん、
ばーあ／第八 童謡の作り方と習作（文話）／第九 楽しい夏
休 その一 大阪まで その二 昼寝の後 その三 夏休中のお便
り 1 金魚たちも 2 今年のお暑さは格別 3 私を愛してく
れた祖母が 4 朝昼海に 5 今日はまだ薬月十五日／第一〇
詩や童謡を散文に たき火（もとの詩）（国木田独歩） その一
焚き火（国木田独歩） その二 童謡と詩二つ 一 アイヌの子
（北原白秋） 二 雪の夜がたり（西条八十）／第一一 句読法
のお話（文話）／第一二 秋：秋：秋 その一 果物の魅惑 そ
の二 名月の悲劇 その三 蚊帳と別れる言葉／第一三 動物を
文字でゑがく ○小さな舌を出したなりで（長谷川二葉亭） ○逃
げないでもない態度で（島村抱月） ○「鼠だな！」と思つた時に
は（土屋長村） その一 馬 その二 かはい、子牛 その三 愛
犬エスへ／第一四 素材が見当たらない時には（文話）／第一五
明治節頃のお便り その一 豆菊も葉蔭から その二 矢餅の裕が
その三 兄さん——／第一六 本を読んだ後で その一 無限

大な母性愛 その二 御話そのものについて その三 唄——といふものが / 第一七 歳末から新春へ その一 暮の日記 その二 福引 その三 年賀状とりぐく ○ハガキの書き方五種 ○私もうれしい十五 ○右の返し ○申し納候なんて ○悔のない一歩々々を その四 先づ幸先よし! その五 トランプの後 / 第一八 砂糖水のたとへ (文話) / 第一九 六つの花散る その一 雪うさぎ その二 冬の朝 その三 雪 (岡田哲蔵) / 第二〇 身辺雑記 その一 お味噌汁 その二 新聞の文字 その三 此の頃の私 / 第二一 学年末頃のお便り その一 寝たっきりの私は その二 是非御一緒に その三 先生は今頃何を その四 もう一つお目出度う / 附録 ペン字の手紙 その一 エハガキで年賀状 その二 年賀状 その三 カルタ会に招く その四 お祭にお出で下さい その五 箱根から その六 表記に転居いたしました。

巻二

第一 母 その一 過ち その二 母の入院 その三 若い母 (木村 恒) / 第二 素描と精写 (文話) / 第三 ガラスその一 夏とガラス その二 コツツンコ その三 雨無三!! / 第四 杜若咲く頃のお便り その一 燕子花に添へて その二 叔母上さま—— ○燕子花 (詩) (著者) その三 息もつがずに一気に / 第五 題のつけ方・文の書出しと結び (文話) / 第六 履物のさまぐく その一 お玄閣風景 その二 波打ちぎはの二の字 その三 下駄の音 (露国文豪ボリス・ピリニャク) / 第七 三十一文字を散文に その一 つゝましさ その二 雀の影 その三 さぐやく小雨 / 第八 詩の作り方と習作 (文話) / 第九 橋 その一 橋:橋 その二 橋上の幻影 その三 「橋」の童話二つ

／ 第二〇 絵葉書便り その一 京都より その二 浅間山麓より その三 大洗海岸にて その四 万世橋畔より (著者) その五 土牢を拝して その六 中房温泉にて その七 山から帰って その八 敵島より その九 松島にて / 第一一 人物の描写について (文話) / 第一二 クラスの人々 その一 クラスの人々 その二 岡沢さん その三 種子屋さん (著者) / 第一三 絵から文を その一 おや!百舌の声が その二 幸福なものは赤蜻蛉 その三 秋のピクニック / 第一四 運動会雑観 その一 うごくをどる その二 臍鳴り肉をどる その三 タイム一二秒七 / 第一五 作者の位置と文の四態 (文話) / 第一六 お便りさまぐく その一 菊の花に添へて その二 みんな私に? その三 二三日とおっしゃらず その四 あふとったお手々で / 第一七 随意に題を求めて その一 塵れ行く音 その二 忘れ得ぬ人 その三 障子のお化 (著者) / 第一八 歌盗人—お話の筋書— ○歌盗人 (ものと話) その一 醜の浮草 その二 女の方がえらい / 第一九 知の文と情の文 (文話) / 第二〇 三月のお便り その一 初雛を贈る (樋口一葉) その二 お姿を見出す日を その三 志願者心得も / 第二一 劇曲の作り方と習作 (文話) その一 儲けた庄助 / 附録 ペン字の手紙 その一 ノートを拝借 その二 ラケットの購入を頼む その三 海幸をお贈りします その四 残念ながらお供が その五 女中のお世話を

巻三

第一 春たけなは その一 「春」といふ字を舞台にして その二 春の精 その三 信濃路にも (島崎藤村) / 第二 主想と副想 (文話) / 第三 転・退職せられし田師へ その一 お懐しい先

生！ その二 矢張り野外の子供で その三 その荒しやうと言つ
たら／第四 俚謡の心を文にして その一 金属の俚謡を連ねて
(加瀬 勉) その二 誰と遊ぶかにこゝと(著者)／第五
雨：雨：雨 その一 四色の雨 その二 蛇の目傘 その三 同胞
その四 五月雨の興 その五 雨に歌がある(野口米次郎)／
第六 和歌の作り方と習作(文話)／第七 官製ハガキの手紙
その一 一葉を風に托して その二 チューリップが その三 只
今富士の頂上に その四 取りいそぎハガキで その五 暑さの御
見舞 その六 雨と鬼ごっこをして／第八 四句の夏休み その
一 未來派の絵のやう その二 お墓参り その三 乗合馬車で
その四 エハガキ便り五つ (1)背中にブランコ (2)毛虫にさゝれ
(3)詩的な別府より (4)落ちた新月の影を (5)北平から／第九 表
現の新味と適切(文話)／第一〇 お話の中間をもとの話 そ
の一 そう一れ御覧なさい／第一一 運動競技の快味 その一 運
動競技の快味／第一二 写生文の話(文話)／第一三 文字で
スケッチ その一 大工さん その二 おいしい匂い その三 いや
／来たぜ(夏目漱石)／第一四 灯ともし頃から黎明まで そ
の一 灯ともし頃の簡 その二 霧の夜 その三 「お早う」と言
ひたくなる(三木露風)／第一五 小話を引伸して その一 も
との話 警官の機智に恐れ入った賊！ その二 こら、待てッ！／
第一六 単純といふこと(文話)／第一七 説明を文で書く そ
の一 ツウテンチャックの仕方 その二 コロッケの作り方／第
一八 睦月・如月頃のお便り その一 この後姿は その二 母
を失ひし人！ その三 お母様！ その四 御本ありがたう(岡田

八千代)／第一九 今は亡き、友の御霊に その一 和子様の御
霊に捧ぐ その二 桃色の輪櫛の折れ(著者)／第二〇 自然と
人事との配合(文話)／第二一 明治大帝・明治神宮 その一
明治神宮に詣でて その二 明治大帝(著者) その三 明治節に
あたりて／附録 その一 風雪の御見舞 その二 類焼御見舞
その三 右の返事 その四 玉のやうなお男子と承り その五 仕
立物の註文

巻四

第一 昭和時代 その一 昭和時代 その二 昭和街頭風景 そ
の三 昭和と少女／第二 文字級に進出した符号(文話)／第
三 十行二百字文 その一 傷ついた指 その二 心なきわざ そ
の三 感謝 その四 火 その五 分らないこと／第四 旅：旅
：旅 その一 をちこちの旅 その二 駒ヶ岳！ 駒ヶ岳！ その
三 京洛の思出 その四 おお、飛沫が頬に冷たい(著者)／第
五 お礼の手紙三つ その一 鈴蘭の友へ その二 此の黒い瞳を
その三 袖だゝみの俣で(梶原紳佐子)／第六 俳句の作り方
と習作(文話) その一 かなのない俳句／第七 画面を自由に
解釈して その一 落人 その二 五銭白銅 その三 お父様のお
帰り／第八 夏休雑題 その一 或日の午前 その二 女と言ふ
ものは その三 珍しい顔を学校へ／第九 余韻といふこと(文
話)／第一〇 健康 その一 幸福そのもの その二 健康なる
が為に その三 「健康」ってこんなもの／第一一 本・書物・
Book その一 かき色の本 その二 本の呟き その三 書物
(西条八十)／第一二 読後の所感 その一 和宮様 その二
「無憂華」を讀みて／第一三 主なる修辭法の知識(文話)／

第一四 をさな児 その一 春雄ちゃん その二 神の寵児 その三 お伽噺の夢でも / 第二五 電文はかうして(文話と習作) その一 お断りとお悔み / 第一六 俳味から散文へ その一 俳句 その二 飛入りの怪力士(正岡子規) その三 馬の顔うつ(矢田挿雲) / 第一七 言葉の魔性・神秘性(文話) / 第一八 言葉 その一 私達の言葉 その二 お国言葉 その三 誤解 その四 言葉(柳沢健) / 第一九 春さき その一 春の土 その二 早春をうたふ その三 露の聲 / 第二〇 異立ちする前 その一 異立つ者の声 その二 栄ある桂の枝を その三 謝辞 その四 尚此の後も その五 是非先生の御光来を / 第二一 共同・社会連帯 その一 共同 その二 社会連帯とは(杉森孝次郎) / 附録 ペン字の手紙 その一 結婚を祝ふ その二 母の死を その三 お悔み その四 卒業後旧師へ その五 同級会の催し その六 外国郵便の宛名 その七 電報頼信紙数葉

巻五

第一 心 その一 神秘なものとして その二 祈らず泣かず その三 心と言葉(和辻哲郎) / 第二 愛と感謝で物観る態度へ(文話) / 第三 醜の美 その一 醜の美を論ず その二 おぼろの美しさ その三 沼の朝もや(中村春雨) / 第四 伊勢路の初旅 その一 杉。杉。杉。 その二 一日一文 その三 飛びく日記 その四 留守中のん記 / 第五 葉 その一 葉五題 その二 菖蒲の葉っぱ その三 私は寂しい気がする その四「葉」の詩二つ(千家元啓・北原白秋) / 第六 文学とは何か(文話) / 第七 「手紙」といふもの その一 一字々々がこく笑って その二 手紙の文字 その三 「手紙」から手紙を その四 古封

筒よ！ / 第八 思ひのまゝに その一 色で観る人 その二 サルビアを愛でて その三 亜細亜は甦る その四 日本(徳富健次郎) / 第九 ラヂオ その一 考へてみれば その二 一べんでいゝから その三 四十八銭也 / 第一〇 文学の内容と形式(文話) / 第一一 校風論 その一 転校者の手記 その二 校風は樹だ その三 校風の同化力 / 第二二 果物 その一 林檎 その二 咽喉から仏になるやう(五十嵐力) その三 西瓜：西瓜：西瓜(東京朝日新聞) / 第二三 唇 その一 母の味 その二 富士山の形そっくり その三 モナ・リサの唇 / 第二四 文学の實質的傾向について(文話) / 第二五 古文に新しい持ち味を原文 源平盛衰記の一節 その一 幻影 その二 芸術だけは不朽だ / 第二六 くさくさのお便り その一 東京だよりー祖母の許へー その二 節分ーかうした懐しい言葉も その三 善い事を喜ぶ心が その四 流感の春に / 第二七 昔の我 その一 紫の富士 その二 神は到る処に その三 アルバムから見た私 / 第一八 詩趣から文姿へ 原詩 おもひで(薄田泣童) その一 旅路の思出 その二 箱馬車に揺られて その三 メモリイを追うて(著者) / 第二九 文学表現上の諸傾向について(文話) / 第三〇 女性の立場から その一 女子体育問題について その二 婦人参政権問題是非 その三 経済困難と緊縮の必要 / 附録 儀礼文さまとく その一 結婚披露の案内状 その二 結婚祝を贈られた礼状 その三 死亡の通知状 その四 告別式参会の御礼 その五 香奠返しに添へて その六 謝恩会の案内状

「現代女子作文」は、菊判平均本文二〇六ページから成り、それに

附録が添えられていた。

「現代女子作文」巻一巻頭に置かれている「緒言」には、編者金子彦二郎氏の意図ならびに作文教科書としての特色・くふうについて、つぎのように述べられている。

一 本書は、著者の前著「現代女子作文」の内容及び形式の全般に亘って、其の全部を書き換へて、昭和聖代即ち一九三一年以後の高等女学校並にこれと同程度の諸学校に学ぶ若き女性達の正しい、美しい、さうして力強い想華の表現能力を根本から鍛へ直し、これを百パーセントに發揮長養させる為の、善き意味での最尖端的指導書たらしめようとの念願で、著作したものであります。

二 本書は、前著「現代女子作文」の序に「：著者は、将来も、興味と研究的態度とを以て、特に高等女学校の作文科を担当し、其の新しい收穫と、時代の要求とに随って、最も優良な指導書に仕上げたい。」と誓っておきました通り、爾來六箇年間の携みなき精進の結果を根幹として著作しましたもので、どの一課一頁と雖も、親しく實際の指導に携って来た著者の、尊い生きた体験と、其の成績とを以て染め出されてゐない所は無く、しかも一貫した理念と体系との下に組織され、生命づけられて居りますので、若き女性達の理知と感情との上に、此の上ない理解と共鳴とを寄与し得ることと信じて居ります。

三 「何も書くことが無い」といふ生徒達も、実は本当に書くべき材料を持合して居ないのでなくて、如何なる方面に着眼すべきかに思ひ当らない者であることを発見しました著者は、著者の提唱する「暗示的指導」を与へることが最も有効な作業であることを認

めましたので、必ず課題と同時に着想や、取材方面や、表現形式等に関する暗示的指導——彼等の創作力や、自由な表現能力を妨げぬ範囲内に於て——を試みます。各課の初めに掲げてあるものは、著者が實際教授に於て与へて有効であつたと認めた暗示的指導の摘要であります。

四 悪文や不良文の剔抉修正といふ消極的手段も、材料と手段さへよければ相応な効果は収められると思ひますが、平明無難な作者は優良な詩文を示して、積極的に其の美点を称揚鑑賞させる方が、遙かに作文能力の増進練磨に有益で効果的であることを認めてゐますので、本書に採録した文例は、大体優秀作品を以てし、一面鑑賞批評の材料とすると同時に、他面また努力仰望の標的たらしめたのであります。従つて、大家や先輩の詩文は、最も適切なものを各巻に数篇づゝ採用してあるだけで、全篇殆ど皆同級・同年輩の生徒諸子の苦心になつた、最も人間味に富み、一度著者の担任する生徒達の鑑賞の関所を通して見て、最も感激を与へたものゝみを選択したのであります。

五 「好きこそ物の上手なれ。」といふ諺は、作文科に於ても著しい真理性が認められます。本書は、生徒をして先づ作文科の作業を愛好せしめて其の能力の進展を促さしめんが為に、出来得る限り生徒達の趣味性を満足させ得る題材を選びました。蓋し、かうした結果、作文を愛好する心情さへ養はれてありますと、必ず実用・芸術何種の文題に対しても、相当な名篇佳作が作り出せるやうになるからであります。

六 尚、今次の根本的書き換へに当りまして、新に取り入れられた試みの中の主なるものは、実に左の十数項であります。

(1) 本書の最大特色でありました同年輩・同学年の少女達の作になった優秀な文例——その全部をば、新たな題目の下に、最近に制作した清新・優雅でかつ生命に高鳴る傑作的文例に取換へましたこと。

(2) しかも、東京女学生の作品のみに偏せしめることを避け、最近特に依囑して試作を乞うた各地の女学校生徒諸子の優秀詩文をも適度に採用按排しましたこと。

(3) さらに又、ところ／＼に現代諸名家の詩文の数篇をも適度に挿入して、変化と実益とに資せしめましたこと。

(4) 文例の脚註に、共通的な誤字及び假名遣や文法上の誤謬を摘録して、其の根絶を期してあります外、今次新に設けました藍頭の上欄に於て、添削や推敲の実際や、文段のきり方や、改行の指示などについて要領よく摘記して、これら大切な諸作業の会得や実習の上に明を開かせるやうに仕向けましたこと。

(5) 著者の謂はゆる「暗示的指導」の外に、さらに毎課其の藍頭に「暗示の鍵」といふ一欄を設けて、当該課題に就ての習作上、絶好な参考資料となり、暗示ともなるべき内外の格言や、類句や、和歌や、俳句などの類の、平易で且趣味的なものを満載して、素材が無くて困るといふ人々への、此の上ない福音たらしめましたこと。

(6) 平易で、趣味が豊で、さうして実益に富む文語を新たに執筆して、多数にとり加へましたこと。

(7) 各巻毎に、該学年相応と思はれる、左の如き創作講話並に其の習作を加へましたこと。

巻一 童謡の作り方と習作 / 巻二 詩の作り方と習作。戯曲

の作り方と習作 / 巻三 和歌の作り方と習作 / 巻四 俳句の作り方と習作

(8) 各文例に対しては、脚註として記入してある短評の外、一文ごとに文末に加へておきました細評は、これを二三などの簡条書に書き改めて、詩文の鑑賞や批評の要領を、より会得し易くしましたこと。

(9) 適切で、優雅で、本文の趣致の鑑賞や解釈力を十二分に助長させるに足る挿画や、カットや、写真を、適所につとめて数多く挿入して、読者のこの方面の好尚をも満喫させるやうに企てましたこと。

(10) 多種多様な新経験として、前著にも曾て試みてありました「絵画に表はれた情景の描写」や「エハガキ文の実習」や「詩や和歌や俳句などの散文化」や、「小話の引伸し」や、「長文の縮約」や、「電報文の実習」などが、それ／＼新たな材料の上に実施されてある外、更に「お話の中間の創作」や、「幾つかの俚語を挿入して文に」や、「戯曲の創作例」などいふ幾多の新しき経験を差加へましたこと。

(11) 尚、当然あるべくして、従来閑却されてゐました卒業生の「答辞」や、送別会の「送別の詞」や、それに対する「謝辞」や「亡友を偲ぶ辞」の如き方面の、実例なども多く取り入れられましたこと。

(12) 小学校からの接続学年である第一学年用に、即ち巻一におきましては、文例以外のすべての文、即ち文語や、暗示的指導や、批評文などを、全部口語敬体に書き換へましたこと。

(13) 附録のペン字を、更に実用に役立つ字体に書き直しましたこと

と。

(14) 活字や組版や装幀や型の上などにも新工夫を凝しましたこと。
と。(同上書巻一、「緒言」、一―五頁)

金子彦二郎編「現代女子作文」全五巻は、当時として、可能なかぎり学習者の作文学習に寄与しようやくふうされ、配慮されていたと認められる。主として旧制高等女学校の生徒たちを対象にして、作文学習の方法を説述するとともに、多くの具体的実例を提示し、「暗示的指導」が進められるように、こまかい心くばりがなされてきた。

なお、この「現代女子作文」には、各課の文例に対する鑑賞批評法や文話その他の敷衍事項や諸名家の筆になる参考文や類題等について細説を施した教授参考書が用意されていた。(資料「『現代女子作文』へ改訂版V著作の趣意」による。)

昭和五年(一九三〇)に至って、旧制高等女学校用作文教科書は、細密化され、近代作文教育の独自の媒材としての役割を果たしうるものに生長したといえよう。金子彦二郎氏編「現代女子作文」は、その代表例の一つとみられる。

二

金子彦二郎氏は、昭和中期、昭和一四年(一九三九)に至って、「新進女子作文」(昭和一四年五月二日、光風館書店刊)全四巻を編まれた。

「新進女子作文」各巻は、つぎのように構成されていた。

巻一

一 入学の喜び 小学校での綴り方―感じた事を題材に―有りの

まゝに表現―入学の喜びを―文例―題材と文題―類題 [文例]

発表の日 忘れられぬ日 / 二 作文用紙の使ひ方(附 添削記号の約束) 身振と談話と文章―作文用紙の使ひ方―添削記号の約束

―予備練習 [文例] 雲の形 文鳥 / 三 遠足・ハイキング 新緑の天地―遠足の文―範圍を狭く―描き出すこと―文例―類題

〔文例〕 遠足の昼食時 ほこりの中を 皇陵巡拝ハイキング / 四 話方の練習 話方と作文―話方の題材―話し振り―姿勢・態度

など―聴き手となつては―類題 [文例] 郵便屋さん お向ひの家 北さん / 五 題材の発見 題材の見附け方―眼の着け所―自己の生活に―意味を見出す―平素の心掛 [参考] 粹の当て方

(津軽照子) よく見れば(相馬御風) / 六 日記の附け方 心の記念碑―日記の效益―絶好の作文練習―記し置く事項―記す要領

―注意すべき事―特殊の日記―誰もが附けよ―日記帳の選び方―文例―類題 [文例] 山荘日記 水泳日記 / 七 夏休中の事柄

長い夏休―特殊の題材―文例―類題 [文例] 外金剛行 掃除 / 八 標語の作り方 時代の寵児―標語の作り方―三つの態度―倒

置法の利用―修辞上の工夫―巧な譬喩を取れ―対偶法の応用―音律的の快調―徹底的な省略法―参考すべき警句法―鑑賞の資料に―作例―類題 [作例] 緊縮強調標語 健康標語 姿勢標語 時の標

語 発明標語 国民精神総動員標語 / 九 句読点 附符号 句読無し文―句読点の必要―句読法の大要―其の他の符号―注意すべきこと / 一〇 動物を題に 手近な動物―外形上の特徴―動作の

観察―習性を知れ―文例―類題 [文例] ミー 雛の生活 ミミ

一 / 一一 お手紙の文 面談の代りに―手紙の文の特質―対者との関係―はがきの使用―其の他の諸注意―文例―類題 [文例]

郷里の先生へ お祭にお出で カルタ会に 一二 年賀状 新たな心で―通常の挨拶―書添へる詞―絵や詩歌を―丁寧^{ていねい}に認めよ―喪中の際は―实例ノ―一三 童謡の作り方 童心を歌ふ―題材となる物―こんな態度で―利用される修辞法―(譬喩法、擬人法、写声法、擬態法、反覆法、押韻法)―記す様式の工夫―類題ノ―一四 コーヒーの甘さ 要を掴まんで―角砂糖の譬―主要な部分を―気の利いた態度―量を約めて質を高めるノ―一五 我家の人の横顔 慕はしさ・懐かしさ―特色・特徴を―人物の描写―文例―類題 「文例」 私の弟 おぢい様と妹ノ―一六 私の文集 世界に唯一つ―思ひ出の糸 巻―若き日の記念―自評・感想など―類題ノ―補一 随時の随意作 随時・随所に―随意作を―文例 「文例」 初雪の日ノ―補二 物語の展開 美しい情操―感傷性の満足―物語の一部分展開―想像力を働かせ―統一ある構成―ただ一二の例をノ―附録 其の一 送仮名法大要 其の二 学校への届書の様式例

卷二 (以下、課ごとの項を保留する。)

一 春の喜び 「文例」 楽しい春 二年生にもなつてノ―二 著想と構想ノ―三 人物の描写 「文例」 近所の人気者 お父さんノ―四 御礼の手紙 「返信資料」 桜桃を贈る 筍を贈る 鈴蘭を贈る 野菜を贈る この後姿のは 「文例」 有難く候 (正岡子規) 小豆と大豆の礼状 (五十嵐力) 袖だたみの俣で (梶原緋佐子) 礼状 鈴蘭の友へ 款待を感謝するノ―五 文題のつけ方 「参考」 題の附け方 (島崎藤村) 新聞の見出し (桜井忠温)ノ―六 俳句の作り方ノ―七 対話を主にして 「参考」 電話 (長谷川二葉亭) 「文例」 身長問題 覚悟してますノ―八 文の四つの体 (説明体・対話体・対話入説明体・自叙伝体)ノ―九 自然の

描写 「文例」 秋の草木 秋の朝 田舎の朝 秋の花の点描ノ―一〇 運動会スナップ 「文例」 選手となつて テープを目掛けて 惜しいオミットノ―一一 「書き出し」と「結び」ノ―一二 お祝の手紙 「返信資料」 男児分婢 初めての女兒 射撃で三等 精勤章を 「文例」 皆々様の御清悦 玉の様なお男子 御進級の由ノ―一三 郷土の伝説 「文例」 吾児が淵 団子祭ノ―一四 知的の文と情的の文ノ―一五 お見舞の手紙 「文例」 祖父の発病の知らせ 母上の病気を知らず 白衣の勇士へ 風害のお見舞 類焼のお見舞ノ―一六 思ひ出 「文例」 れんげ草の咲く頃 思ひ出ノ―補 俳句日記 「文例」 田園日記 (俳句日記)ノ―附録 其の一 お手紙の構成とその用語例 其の二 現代俳句季題表

卷三

一 映る姿を 「文例」 河畔 春色動くノ―二 想の主と従ノ―三 短信―雅信 「文例」 旧都の佛を 日本三景の一 詩集も喜ぶことせう 江の島にてノ―四 雨の趣 「文例」 夕立 雨上り 雨の四色 「参考」 四季の雨 雨の降り振りノ―五 新鮮な表現ノ―六 歌の作り方 「作例」 園芸の歌 七夕祭 阿蘇山 日光の旅 和歌の会ノ―七 時間上の個性 「文例」 炎天下の点描 朝草刈りノ―八 写生文の要領ノ―九 スポーツの快味 「文例」 最後の一点 走高跳ノ―一〇 単純化の滋味ノ―一一 勅題の詠進 「作例」 朝陽映島 神苑朝 山紅葉 菅公祭献詠 静寛院和宮献詠 創立廿五周年祝歌 針供養の歌 敬老会の歌ノ―一二 自作の歌謡 「文例」 千人針 野菜畠 少女の腕 かぶ坊主 お芋ノ―一三 手紙の練習 「文例」 叔母に写真を送る 安らかな臨終 添削を願ふ 忘れ物を問合はせるノ―一四 自然と人事ノ

一五 戯曲の習作 「文例」 おばあさん万歳 美しき姿 / 一六
筆のまに〜 「文例」 風 空 軍国の女性 / 補 和歌日記
「文例」 短歌日記 夏休四十日 / 附録 漢字字体整理案

巻四

一 四月の感懐 「文例」 最上級生となって 思ひ出の春 /
二 主なる修辭法（直喩法、隱喩法、諷喩法、活喩法、誇張法、
省略法、挙隅法、反語法、詠歎法、設疑法、擬想法、対句法、対照
法、現写法、引用法、倒置法、段階法、反覆法、警句法） / 三
十行 二百字文 「文例」 空と土 弓道 窓の開閉 短章四つ
／ 四 旅の印象 「文例」 旅行の印象を拾ふ 旅とところどころ
撞れの東京第一日 / 五 符号の躍進 / 六 詩の作り方 / 七
感想と評論 「文例」 花の紐 小さな悟り 音 / 八 物観る
態度 / 九 女性の立場で 「文例」 現代女性の使命 模倣から
脱却せよ / 一〇 読後の感想 「文例」 野上弥生子の「大石良
雄」に就いて 「一粒の麦」を讀みて / 一一 電報の文案 / 一
二 四季の情趣 「文例」 自然によせて / 一三 論説的の文章
「文例」 我等の大道 / 一四 諸種の手紙 「文例」 御転任に
なられる恩師へ 受験の敗残者に寄する慰めの手紙 / 一五 言葉
の神秘性 / 一六 式辭文と挨拶 「文例」 祝辭（卒業式に）
答辭（卒業式に） 創立記念式 / 補一 受験作文（その一） /
補二 受験作文（その二） / 附録一 入受試験作文問題 受験作
文と本書との連繫 二 証明書下附願 履歴書

「新進女子作文」は、菊判平均本文一五六ページから成り、「現代
女子作文」五冊を四冊に改編し、内容についてもかなりの取捨が行

われた。

昭和二年（一九三七）改正された、「中等学校教授要目」（国
語漢文）によると、高等女学校については、「作文ハ正確自由ナル
表現ニ就キテ指導シ平明達意ニシテ実用ニ適スル各種ノ文ヲ作ラシ
メ且其ノ添削批評ヲ為スベシ」とあり、第一・二学年は、作文は毎
週一時、第三・四・五学年は、隔週一時となっていた。

「新進女子作文」は、各卷一六課から構成されており、各卷とも文
学的な趣味の養成を図ること、実用的な価値の高い文章の習得をし
ていくことを中心に、類題を示し、文例を掲げ、文話をゆたかに用
意し、周到に編成されていた。

全卷を見ていくと、たとえば、

卷一 四 話方の練習 / 一六 私の文集

卷二 二 著想と構想 / 五 文題のつけ方 / 八 文の四つの

体 / 一一 「書出し」と「結び」

卷三 二 想の主と従 / 七 時間上の個性 / 八 写生文の要

領 / 一〇 単純化の滋味

巻四 三 十行二百字文 / 一三 論説的の文章 / 一五 言葉

の神秘性

など、注目すべき試みや文語が収録されている。

当時の作文教科書が、文章表現に関し、どういう範圍にわたっ
て、どういう文章形態・表現法について学習させようとしていた
か、また、当時の生徒たちの文章表現の水準はどういうものであつた
か、これらの点について、「新進女子作文」全四卷は、多くの示唆
を与えてくれる。

昭和初期・中期における旧制高等女学校の作文教科書としては、ほかに、つぎのようなものが見られる。

○「新制女子作文」全四冊 八波則吉編 昭和五年（一九三〇）

一月五日 英進社書店刊

○「現代女子新作文」全四冊 八波則吉編 昭和九年（一九三

四）一〇月二五日 英進社書店刊

○「女子作文新講」全四冊 与謝野晶子編 昭和五年（一九三

〇）二月一日 困風閣刊

○「新選女子作文」全四冊 尾上八郎・堀越喜博編 昭和六年

（一九三一）一月一〇日 至文堂刊

○「女子新作文」全三冊 玉井幸助編 昭和二年（一九三七）

二月五日 三省堂刊

○「女子新作文」全四冊？ 丸山林平編 昭和二年（一九三

七）二月五日 東京開成館刊

○「作文 女子用」全四冊 斎藤清衛編 昭和三年（一九三

八）一月七日 星野書店刊

○「女子作文」全四冊 久松潜一編 昭和三年（一九三八）一

月八日 靖文社刊

○「女子新作文」一冊 吉田絃二郎編 昭和三年（一九三八）

一月二〇日 富士房刊

これらを見ると、昭和一二年（一九三七）の教授要目改正を機として、作文教科書の新しいありかたを目ざして編まれたものがほぼ出揃っている。

こうした作文教科書は、副教科書として用いられ、自習書として

も使われた。毎週一時間（一、二年）、隔週一時間（三年以上）の作文の時間に、どのように活用していくかは、教授者としても苦しななければならないところであった。

これらの教科書は、編著者の編修方針によって、それぞれ自在に編まれているとはいえ、前掲金子彦二郎氏編「現代女子作文」↓「新進女子作文」の組織・構成・方針とほぼ同じいきかたがとられていた。そこに一九三〇年代の旧制高等女学校を対象とした、作文教科書の到達水準と基本類型を見いだすことができる。（昭和52年6月12日稿）（本学教授）